

ティカル産土器の判定に向けた予備調査報告

今泉和也（明治大学）

ホルヘ・チョコン（サン・カルロス大学）

発表要旨

土器の生産体制に関する研究や土器の生産地を推定する研究はこれまでに多くなされてきた。しかし特に前者に関しては明確な土器焼成址の検出に至っておらず、特に古典期以前における土器生産体制については十分に理解できていない。後者に関しては美術様式の違いも大きいことから地域レベルでの産地区分は概ね可能である。一方で遺跡を単位とした在地土器の特定は不十分であり、一部の精製土器を除いて交易・市場を介した土器経済については明らかになっていない。

これまでに碑文学研究により政治的な側面に関していくつかの詳細な都市間関係像が示されており、そうした都市間関係のクロスチェックとして考古学が機能する必要がある。あるいは碑文情報において不足している都市間の経済的側面について考古学が補完的に機能する必要がある。考古学研究、特に土器研究においては上記2点の機能を備えるために地域レベルではなく、遺跡単位あるいは少なくとも現行より小さなエリアでの産地による分類が求められていると言えよう。

こうした状況を打開すべく、ティカル土器生産区域特定プロジェクト（**PIBPAT ; Proyecto Identificación de Barrios de Producción Alfarera en Tikal**）では、ティカルにおける土器生産体制について明らかにすることを目的として調査を実施している。産地同定法については型式学的研究法・岩石学的研究法・蛍光X線分析法の3者の非破壊分析手法を組み合わせた方法を検討しており、本発表ではティカル産の土器を特定するための研究の一環として、ティカルを囲む湿地帯における粘土、及びティカル周辺の湖や季節的河川における砂を対象とした分析結果について報告する。本研究では、粘土及び砂試料に対して岩石学的手法を用いてそれぞれの鉱物組成を明らかにした。これによりティカル周辺部においては地質的な地域性が十分に存在し、ティカルと周辺遺跡とで出土した土器胎土に見られる鉱物組成の比較研究はこの地域における土器の原産地を同定する方法として有効であると考えられる。

メソアメリカにおける日干しレンガ（アドベ）の起源と展開

市川 彰（日本学術振興会海外特別研究員/コロラド大学ボルダー校）

発表要旨

古代メソアメリカ文明最初期のメキシコ湾岸のサン・ロレンソやラ・ベンタ、メキシコ中央高原を代表する Cholula や Teotihuacan など多くの巨大建造物は「土」が主たる建築材である。しかし、これまでの研究では、とりわけマヤ地域の「石」で造られている建造物や建造物装飾に目が行きがちであり、土の建築に関する研究というのはあまり進んでいない。土の建築といってもその建築技術は単純ではなく、多様である。本発表では、そのなかでも「日干しレンガ（アドベ）」の起源と展開について取り上げる。なぜなら、日干しレンガ技術の研究から、製作技術、建築技術、労働組織といった側面だけではなく、地域間交流、技術の伝播、社会政治組織などといったテーマにも敷衍することが可能だからである。また、日干しレンガ技術は北米から南米まで広い範囲でもみられることから、メソアメリカという枠を超えた比較研究の展開が将来的には見込める点も日干しレンガを取り上げる理由でもある。

本発表では、まず、メソアメリカにおいて、日干しレンガがいつどこで製作されはじめ、どのように広がっていったのかを日干しレンガの出土状況やその分布、編年から探る（図 1）。現状では、日干しレンガは先古典期中期ごろからメキシコ湾岸やオアハカ地域で製作が開始され、次第に周辺地域に波及し、Cholula や Teotihuacan の巨大公共建築などに利用されるようになる。また日干しレンガを単に建築材としてだけではなく、墓の一部や道標としても利用していたことを示す事例も紹介する。次に、発表者が実施してきたエルサルバドル共和国サン・アンドレス遺跡やチャルチュアパ遺跡での調査事例から、日干しレンガをめぐる研究の着眼点や研究手法について具体例をあげながら紹介する。それらをふまえて日干しレンガの研究から古代社会のどのような側面にアプローチができるのか、土の建築の研究全体の底上げを図るとともに、今後の研究の方向性について展望する。

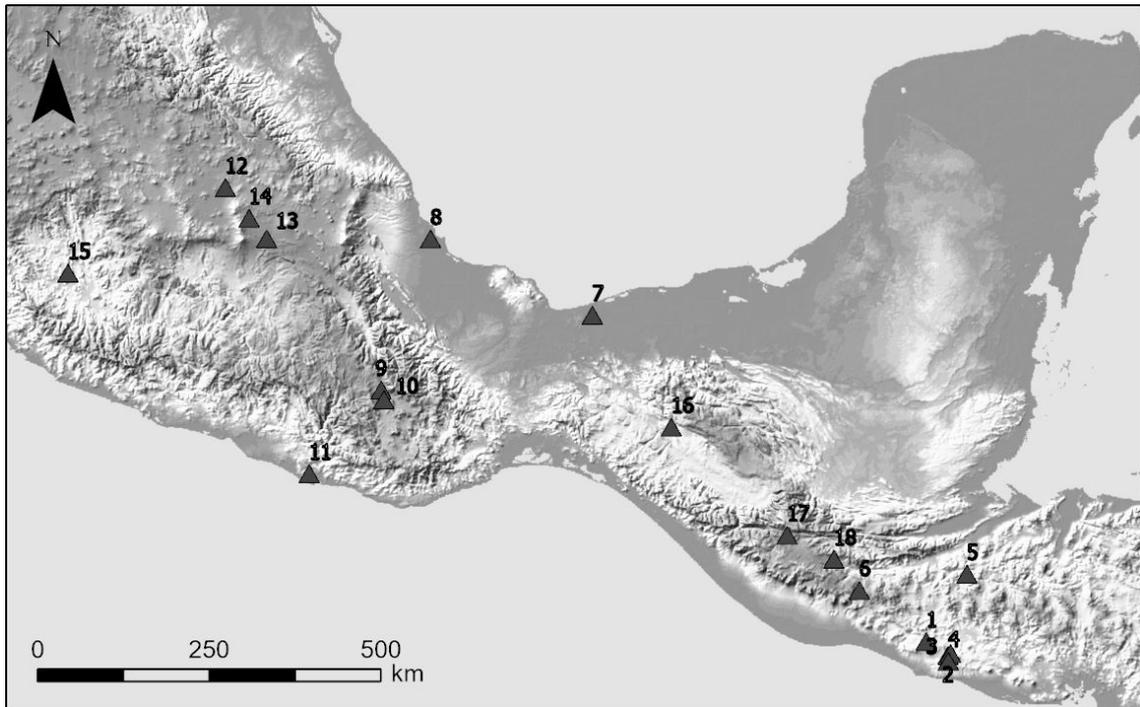


図1 日干しレンガが報告されているメソアメリカの主な遺跡

1. チャルチュアパ、
2. サン・アンドレス、
3. ホヤ・デ・セレン、
4. ヌエボ・ロウルデス、
5. コパン、
6. カミナルフユ、
7. ラ・ベンタ、
8. ラ・ホヤ、
9. サン・ホセ・モゴテ、
10. モンテ・アルバン、
11. リオ・ビエホ、
12. テオティワカン、
13. チョルーラ、
14. トララカンカレカ、
15. ロマ・デ・ピリクアロ、
16. チアパ・デ・コルソ、
17. サクレウ、
18. サクアルパ

エルサルバドル西部出土の銅鈴と土製パイプの起源に関する予察

白鳥祐子（京都外国語大学）

伊藤伸幸（名古屋大学）

発表要旨

エルサルバドルの西部に位置するチャルチュアパ遺跡群は、これまでの調査で先古典期前期（紀元前 1000-650 年）から後古典期前期（後 900-1200 年）の居住が確認されている。後古典期初期の層位や地表から出土する遺物のなかで特に興味深いものは、土製品、石製品、金属製品、石彫などの中に、メキシコ中央高原など北との関係性を示す遺物の出現である。これらの遺物は、この時期にナワ語の方言のような言葉を話す人々が、メキシコ中央高原から移動してきたとする説を裏付けている。

16 世紀にスペイン人がエルサルバドル西部を訪れた時、メキシコ中央高原で話されていたナワ語に似た方言を話す人々に遭遇する。彼らは言語だけではなく、宗教観などの文化面においても、メキシコ中央高原のものと類似することが、当時の文献から確認できる。彼らは「ピピル (Pipil)」と呼ばれ、これまで考古学、言語学、美術史学、歴史学、民族学などの多分野にわたって研究されており、現在までにピピルは 10 世紀頃メキシコ中央高原から太平洋側を移動してきたと考えられている。

近年チャルチュアパ遺跡群のエル・トラピチュエ地区で、後古典期メキシコ中央高原との関係性を示す銅鈴と土製パイプの破片が採集されており、チャルチュアパ遺跡群におけるピピルについて再考する機会を得た。2019 年にチャルチュアパ市カサ・ブランカ遺跡公園内のラボにおいて、予備調査として銅鈴と土製パイプの実測と、ハンドヘルド蛍光 X 線分析器による元素分析を行い、これらの遺物の起源を探った。

本発表では、2019 年に行われた予備調査の概要を示し、ハンドヘルド蛍光 X 線分析器による銅鈴と土製パイプの元素分析の結果を報告する。また、これら銅鈴と土製パイプの様式と文化的背景について考え、他地域出土のものと比較検討し、後古典期ピピルの人々の移動について推定する。最後に、この研究の今後の展開について検討したい。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土の素面石碑と祭壇について

伊藤伸幸（名古屋大学）

相場伸彦（名古屋大学大学院）

発表要旨

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区では、名古屋大学が 2012 年から 2019 年にわたり、考古学調査を実施してきた。この地区では、エルサルバドル最大の約 24m の高さを誇る E3-1 建造物がある。2012 年からの発掘では、その南側から、東西方向にのびる石列が検出された。この石列はイロパンゴ火山噴火による降下火山灰層（TBJ）の下から検出されており、先古典期後期以前と考えられる。また、E3-1 建造物の西側で、石列がなくなる端辺りでフラスコ状ピット 3 基が検出されている。また、E3-2 建造物北側では、円筒形状のピットも検出されている。以上のことから、先古典期中期に建造された E3-1 建造物は、その後、石列と石の建造物で区画された地域を聖なる区画とし、それよりも外側の地区で世俗的な生活を営んでいたと考えられる。

石列の方向は、E3-1 建造物の建築のための基線とは、ほぼ 90 度をなしている。また、先に出土したジャガー頭部石彫の更に南に位置している。E3-1 建造物西側に、この石列から北方向にのびる石列が検出されている。この南北方向の石列は、石の建造物の一部であった可能性が高い。

一方、更に南にある E3-2 建造物と E3-3 建造物はこの石列よりも南にあるが、この石列がつくられた時期には存在していないと考えられる。この E3-2 建造物が建つ前若しくは最初の建物が建つ頃に相当する層から、素面の石碑と素面の祭壇石が出土した。しかし、石碑は立った状態ではなく、横たわった状態であった。また、祭壇石は 1 基ではなく、2 基あった。片方は平らな面を上にし、もう 1 基は平らな面を下にしていた。

本発表では、チャルチュアパ遺跡で出土した素面の石碑と祭壇について、石碑-祭壇の終結儀礼について考察する。また、先古典期後期のメソアメリカ南東部太平洋側の同様の石碑と祭壇についても、この事例と比較検討する。

ワヌコ盆地における初期レクワイ文化の痕跡：ビチャイコト遺跡の調査成果から

金崎由布子（東京大学）

大谷博則（アンカシュ州ワラス郡インディペンデンシア区役所）

ダニーロ・デパス（ワラス大学）

発表要旨

本発表では、ワヌコ盆地ビチャイコト遺跡で発見された初期レクワイ文化の痕跡について報告する。2019 年に発掘調査を行ったビチャイコト遺跡では、形成期前期の堆積の上に、これまでワヌコ盆地で報告されているいずれの文化のものとも異なる特徴を持つ土器を伴う方形の建築遺構が検出された。炭素年代測定からは紀元後 200-300 年頃の結果が得られ、地方発展期に相当する時期であることが判明した。ワヌコ盆地の地方発展期の文化は、イゲーラス文化の名で知られており、赤橙色の厚手の有頸壺と半球鉢を主体とする土器、円形の石造建築などが特徴とされてきた。しかしながら、ビチャイコト遺跡の土器はイゲーラス文化のものとは様々な点で異なっており、建築の形態も特異なものであった。

ビチャイコト遺跡の土器において最も特徴的なのは、白色・クリーム色を呈し、赤褐色で彩文が施された鉢片の存在である。これらは内側まで白色であり、カオリン製もしくはそれを模して作られたものと考えられる。このような土器は近隣ではアンカシュ地域に見られるものであり、初期のレクワイ文化の土器によく似た類例が存在する。また、有頸壺は赤色のものだけでなく、灰色および褐色のものかなりの割合を占め、頸部の形状もイゲーラス文化の典型的な有頸壺とは異なっている。一方で、埋葬に伴って出土する、口縁部に突起部をもつ赤橙色の半球鉢はイゲーラス文化のものによく似ている。

ビチャイコト遺跡は日常的な居住址というよりも、祭祀的性格の強いものであったのではないかと考えられる。方形の建築遺構の床下は、50cm 以上におよぶ厚い灰層となっており、多量の土器、ラクダ科・シカ科動物の骨、骨角器、水晶塊などが含まれていた。また完形のスポンディルス貝も出土した。方形建築の周囲では複数の埋葬が発見され、土器のほか銅製の *tupu* や小像が副葬されていた。ビチャイコト遺跡の事例が、イゲーラス文化とどのような関係にあるのかは未だ不明であるが、当遺跡の存在は、ワヌコ盆地の地方発展期における外部地域との交流を示すものとして重要である。

パコパンパ遺跡における埋葬儀礼の変化に関する試論

中川渚（国立民族学博物館）

フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス・チョカーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

発表要旨

本発表では、ペルー北部高地の形成期神殿、パコパンパ遺跡における PC-II 期（紀元前 800-紀元前 500 年）の埋葬儀礼の変化を、主に埋葬コンテキストから出土した壺などの、いわゆる粗製土器から分析する。

埋葬の研究方法としてこれまで多く用いられてきたのは、墓穴の形状、埋葬体位、頭位方向、副葬品の有無や内容、頭蓋変形などの属性で分類し、それらの組み合わせからパターンを見出そうとするものである。また、墓穴内の堆積や遺物の層位的、平面的な出土地点、人骨の状態や、他の建築物との関連性から、埋葬プロセスも分析されてきた。パコパンパ遺跡でもこのような分析がすでにされており、成果が報告されている。しかし、副葬品の土器の分析については、完形、半完形の磨研土器など装飾のある土器や、高杯などやや特殊な器形の土器のみに限られており、これらの土器の分析からは、特に埋葬の時期変化は見出されていなかった。同遺跡の埋葬からは、完形にまではならないものの、埋葬と関連しているとみられる大型壺の破片が共伴している例があり、本発表では、これらの土器のデータを、これまでのデータと突き合わせた結果見出された、埋葬儀礼の変遷についての試論を提示する。

分析の結果、11 基の墓から埋葬に伴うとみられる大型壺破片が確認された。これらの壺破片は、調理の痕跡のあるものと、体の一部を覆っていたと想定されるものに分けられ、それぞれ埋葬時のプロセスとの関係や、傷病との関係が示唆される。また、時期別にみると PC-IIA 期では 11 基中 1 基、PC-IIB 期では 10 基と数に偏りが認められた。PC-IIA 期の終わりには埋葬域に隣接するパティオ内で饗宴が開始されるため、同じ頃に埋葬時の共食が始まり、PC-IIB 期で活性化した可能性や、PC-IIB 期から埋葬儀礼が複雑化した可能性が考えられる。

ペルー南海岸、トレス・パロス I・II 遺跡の編年的位置づけに関する考察

松本雄一（山形大学）

ホルヘ・オラーノ・カナール（パリ第一大学）

坂井正人（山形大学）

発表要旨

中央アンデスにおいて、ミドルホライズン（紀元後 600-1000 年）と呼ばれる時代は、大まかに中央高地アヤクチョ地方に起こったワリ政体の発展とその他地域との交流、あるいは帝国となったワリ帝国による支配の痕跡が広い地理的範囲に見られる時期とされる。近年は、ワリ遺跡周辺以外、特にこれまで調査の進んでいなかった南海岸におけるミドルホライズンのデータの蓄積が著しく、中心とされるアヤクチョ以外の場所でのワリの痕跡がどのような性質を有していたか、他地域においてローカルな政体とどのような関係にあったかなどのテーマが汎アンデス的な共通性と地域的多様性の両面から議論されている。

山形大学ナスカプロジェクトでは、ペルー南海岸リオグランデ水系に属する河川の一つであり、同水系内でグランデ川本流に次いで水量の豊かな河谷であるインヘニオ河谷において 2013 年より踏査を行い、2017 年までに 573 遺跡の存在を確認した。そのうち 51 の遺跡からミドルホライズンに対応する土器、あるいは建築の存在が確認されている。中でも特に重要なのは、2016 年の調査で確認された、トレス・パロス I、II と呼ばれる遺跡である。同遺跡は、1957 年に合衆国の考古学者 William D. Strong によって祭祀センターとして言及されたがその後長く遺跡の存在が確認されることはなかった。発表者たちの表面調査により、D 字型建築や直交する細胞状建築などワリの典型的な建築を有する可能性が示唆され、同遺跡がペルー南海岸に存在する数少ないワリの行政センターの一つであることが明らかになった。本発表では、同遺跡の表面調査によって採取された土器資料の様式を他地域の出土遺物と比較し、表採資料の絶対年代データと合わせて論じることによってその編年を仮説的にではあるが論じ、将来的な発掘調査への見通しを提示する。さらに、同遺跡の編年上の位置づけをもとに、ワリの拡大と衰退をめぐる南海岸の動態をめぐるこれまでの議論を再検討する。

ワリ期の建築について

渡部森哉（南山大学）

発表要旨

中央アンデス地帯には後 8 世紀から 10 世紀にかけてワリ帝国が台頭した。その支配域はカハマルカからモケグアまで及んだ。ワリ文化の物質的証拠は主に土器や織物の図像表現、そして建築様式である。本発表では建築の特徴からワリ帝国の証拠について考察する。

地方におけるワリの証拠は建築様式に着目して議論されてきた。特にクスコのピキリヤクタ遺跡とワマチュコ地方のピラコチャパンパが 1940 年代から着目されてきた。類似した建築様式を伴う遺跡が他にも見つかると、それをウィリアム・イズベルは「直交する細胞状ホライズン」と命名した。しかし一方で、地方においてワリ様式の図像表現を伴う遺物の量は少ない。つまりワリ様式の建築の遺跡で、大量にワリ様式の土器が出土するわけではない。また逆に、ワリ様式の遺物が見つかる遺跡に必ずワリ様式の建築があるわけでもない。ワリ様式の関係土器などは墓や奉納というコンテキストで出土することが多い。

建築様式に関しては、ワリ様式の建築として D 形建造物があることが認定された。また、「直交する細胞状ホライズン」には当てはまらない建築の特徴を、「不規則に累積する建築」とイズベルはまとめた。コンチョパタ、セロ・バウル、ホンコパンパ、などの遺跡が例である。こうした遺跡群がワリ文化のものであると判定する基準はワリ様式の土器があるか、あるいは D 字形建造物があるということである。建築様式そのものからワリ文化のものであると判定できるわけではない。

本発表では、ペルー北部高地カハマルカ地方を事例として、ワリ期の遺跡の建築について考察する。エル・パラシオ遺跡は全体が分かっているわけではないが、発掘された範囲内では、「不規則に累積する建築」を主体としつつも、同じ建築軸の建物が広範囲に広がるなど、「直交する細胞状ホライズン」の一部の特徴を示す。パレドネス遺跡は、連結されていないいくつかの建物とチュルパ（塔状墳墓）で構成される。テルレン＝ラ・ボンバ遺跡の建築は「不規則に累積する建築」に括られるであろうが、一見してワリ期であると判定できる特徴は少ない。他にもワリ期と考えられる遺跡がカハマルカ地方にあるが、それらの共通点、相違点について考察する。

布圧痕をもつワウラ様式土器

市木尚利（立命館大学）

吉田晃章（東海大学）

栗野若枝（東海大学）

発表要旨

布圧痕の分析は土器製作での布の一般的使用の有無や、使用が認められた場合には土器製作のどの段階で、どのような布が使用されたのかを明らかにするために必要な作業である。これまでエクアドルなどで布圧痕をもつ土器の存在が報告され、レプリカの作成とその分析がなされてきた。しかし、X 線 CT 分析、走査型電子顕微鏡などでの観察、画像撮影・分析までは実施されてこなかった。

本研究の対象であるワウラ様式はペルー共和国ワウラ河谷中下流域を中心に、中期ホライズン後半（後 8 世紀後半～11 世紀）に発展した地方様式の土器である。1940 年代からペルー考古学において研究対象となってきたが、器種・図像の分析が主であった。製作技法や布圧痕の有無については詳細な分析はされていない。

しかし、2021 年に東海大学所蔵アンデス・コレクションのワウラ様式 1 点に布圧痕を確認した。そこで、東海大学アンデス・コレクションのワウラ様式 33 点の分析に着手した。X 線 CT 分析と画像撮影、レプリカ作成とマイクロスコープ及び走査型電子顕微鏡による観察と画像撮影を行った。

結果、土器は粘土塊を引き延ばした手づくねによって成形されていること、そして布圧痕については平織・S 字撚りであることが判明した。今回の方法論によりどのような成形技法において、どのような織技・組織図をもった布が使用されていたかが明確になった。

ただし、土器製作における布利用の頻度やその継続が不明であるため、今後の課題は以下の 3 点である。1 点目は布圧痕をもつワウラ様式土器の事例を集成していくことである。2 点目は後期中間期のチャンカイ様式土器の布圧痕事例を集成することである。すでにアンコンでチャンカイ様式の事例 1 点確認している。3 点目は織物の研究者との共同分析を進めることである。これは、土器工人がどのような技法で製作された織物を土器製作に使用していたかを考察するために必要な作業となり、今後の基礎研究の継続が欠かせないものである。

航空古写真による地形と遺構の復元：ペルー北部ヘケテペケ川流域を中心に

鶴見英成（東京大学）

大谷博則（アンカシュ州ワラス郡インディペンデンシア区役所）

松本剛（山形大学）

渡部森哉（南山大学）

山本睦（山形大学）

発表要旨

発表者は広く景観分析に役立てるために、ペルー空軍航空写真局による 20 世紀の航空写真を網羅的に入手し、三次元データとして地形や遺跡の形状再現を進めている。本発表では分析方法の概略を示した上で、とくにペルー北部のヘケテペケ川流域を中心に、破壊前の遺跡の形態復元の成果を提示する。急速な国土開発の裏で文化遺産の不可逆的な破壊が続く状況下、失われた情報を回復し考古学的知見を補強することの意義は大きい。

ペルー空軍の航空写真は地形図作成の目的で撮影され、古くは 1940 年代からのものが現存する。従来はプリントでの提供であったが、現在は高解像度スキャンデータが販売されており、情報量が大幅に向上した。撮影対象は当時の農林業において重要性の高い地域に限られ、高度などの飛行条件によって有効性の低い写真もある。これを用いた三次元データ作成には前例があり、例えばパチャカマ遺跡では補正のためトータルステーション測量を併用しつつ、2 枚を元に作成されたが、処理には多大な労力を要した。本研究課題においては近年一般的な手法となった、ドローン空撮からのオルソ画像作成を規範として、連続撮影された多数の写真を扱いつつ、なるべく平易な PC 環境での作成を目指している。

ヘケテペケ川では 1960 年代より盗掘が横行し、中流域上部のワリ帝国期（9～10 世紀）のテルレン=ラ・ボンバ遺跡は建造物も損壊している。中流域中部テンプラデーラ村一帯は、北岸に形成期前～中期（前 1500～前 800 年）の神殿遺跡群、南岸に流域最古となる形成期早期（前 2000～前 1600 年）の神殿が分布する重要な地域であるが、80 年代の貯水池建設で多くが水没し、新道建設で削平され、環境変化によって段丘が徐々に崩落して遺跡が縮小している。中流域下部のポルボリン遺跡は流域最大の形成期前～中期の神殿であるが、宅地開発によりここ 20 年ほどで大幅に破壊された。これらの遺跡の破壊前の様態について 1940 年代の写真を中心に検討する。

ペルー北部におけるリャマの重要性とその社会的位置づけ

山本睦（山形大学）

鶴見英成（東京大学）

発表要旨

ペルー北部では、形成期中期（前1200年～前800年）から形成期後期（前800年～前250年）にかけて、地域間交流の活発化や社会組織の変容といった様々な現象が連動して、大きな社会変化が生じた。また、これまで周縁とされてきたペルー最北部地域の社会変化は、地域間交流を介して、ペルー北部あるいは汎地域的な社会変化と密接に関連していることも次第に解明されてきた。

こうした状況のなかで、ワンカバンバ谷にある神殿遺跡のインガタンボは、地政学上の重要地に位置し、クントウル・ワシやパコパンパという大神殿との交流をもちながらも、最北部の海岸や熱帯低地とのつながりを通じて、独自の交流ネットワークを形成・維持していたと考えられる。また、インガタンボでは、神殿で繰り返される諸活動を支えるために地域間交流が重要な社会戦略となったが、それには荷駄獣としても利用されるリャマ（ラクダ科動物）の利用と地域間ルートの変化が密接に関与していたことも示唆された。

ここでポイントとなるのが、ラクダ科動物の自然生息域外であったペルー北部において、リャマが利用されるようになった際に何がおこったのかということである。ペルー北部におけるリャマについては、形成期前期（前1500-前1200年）から少ないながらも利用の痕跡が認められるが、利用がより顕著となるのは形成期後期になってからである。また、近年ではパコパンパのデータから、形成期後期には北部山地で飼養がはじまったことも示唆されている。これにはもちろん生態環境が影響したと考えられるが、ペルー北部の出土事例をみると、そこに社会的な要因が大きく関与したことは明らかである。

それをうけて本発表では、大きく以下の2点について検討する

第一に、ペルー北部におけるリャマの導入の契機についてである。これに関しては、従来からアンデスで強調される東西の環境差だけでなく、南北差が大きく影響しているのではないかと発表者は考えている。そこで、具体的なデータを示しながら、ヘケテペケ谷やワンカバンバ谷が一つの境界となり、その南北でリャマ利用のあり方が異なった可能性について論じる。

第二に、ペルー北部で形成期中期から形成期後期に生じた社会変化と、リャマ利用および飼養との関係である。リャマを飼養し、キャラバンとして用いるには、動物の特徴を十分に把握しておく必要がある。そこで、自然生息域外であるペルー北部でリャマの利用と飼養がはじまった際に、リャマをもたらした人々とリャマがもたらされた地域の人々の間にどのような関係が生じたのかについて、北部山地の考古学データと中央および南部山地の民族誌データを比較しながら検討する。より具体的には、リャマおよびそれを主体的に扱う人々が、北部山地の様々な神殿において多様な役割をはたしており、それぞれの社会で異なる社会的位置づけにあったという仮説を示す。

土器の儀礼的殺害—シカン遺跡大広場における饗宴跡から—

松本剛（山形大学）

ガブリエラ・デ・ロス・リオス（ランバイエケ複合考古学プロジェクト）

ガブリエル・ビジェガス（国立シカン博物館）

発表要旨

本発表は、ペルー北海岸・シカン遺跡大広場における近年の発掘調査での発見をもとに、土器の儀礼的殺害がおこなわれていた可能性と、その儀礼的行為の意味について論じるものである。

松本がデ・ロス・リオスらとともに 2016 年より調査を継続しているシカン遺跡中心部の大広場では、大規模な饗宴の跡が見つかった。この饗宴跡からは、大小さまざまなカマドとともに、給仕用の皿や浅鉢、調理・貯蔵用の壺や甕の欠片、夥しい量のゴミ（動植物や魚介類の遺骸）などが出土した。これまでに発表した論考において、松本は、大広場を取り囲む埋葬複合でおこなわれたエリートらによる祖先信仰との関連を指摘し、彼らが祖先を追悼するために開いた饗宴であると主張してきた。しかし、この饗宴跡からは、通常の飲食行為以外にも様々な儀礼的行為の痕跡が見つかった。

まず、調理・貯蔵用の有頸壺や大型無頸甕の肩部に付けられた人や動物の頭部を模したアップリケを切り取って、ごみの中に廃棄（埋納？）するという行為が繰り返し確認された。2016-2019 年の三度の発掘シーズン中に、合計 419 点が出土している。なかには、土器を割り、アップリケの周辺も含めて大きく切り出しただけのものもあるが、その多くは、さらに周囲の余分なところを注意深く取り除いてアップリケだけをクリッピングしたものであり、明らかに意図的な行為であることを示している。また、いくつかのアップリケには穿孔の跡もみられる。我々は、この「頭部を切り取る」という行為が儀礼的な殺害（ritual killing）を意味しているのではないかと考えている。だとすれば、これにさらに穿孔を施すということは二度の殺害を意味することになる。

同様に儀礼的殺害の可能性を示唆するものとして、口縁が外側に広がった有頸甕の頸部より上を切断したものをまとめて埋納するという行動も確認された。大広場での饗宴は時代が下るにしたがって大規模化していくが、アドベで縁取られた大きなカマドのなかで、複数の頸部がひとまとまりになって出土した。いずれも同じようなところで切断されており、完形で出土した。これらが切り取られた甕を人体に見立てるなら、頸部より上は頭部に当たる。これもまた、「頭部を切り取る」という儀礼的殺害を意味しているのではないか。

このように頭部や、それを切り落とすことへの執着はランバイエケ文化の各所にみられる。たとえばベンタナス神殿の「南の墓」内部の壁面を飾っていた金属板には、「シカン神」と呼ばれる人物が左手に儀礼用ナイフ（トゥミ）、右手に首級をもつ姿が描かれている。また、ロク神殿西側麓の墓地では、実際に頭部を切断された二体の生贄遺体が見つかった。

では、頭部を切断することは何を意味するのだろうか。本発表では、同じく大広場で見つかったその他の発見との関連において、頭部切断という儀礼的行為の意味について我々の見解を示す。

ペルー北高地パコパンパ遺跡における偶蹄類の儀礼的消費

鵜澤和宏（東亜大学）

関雄二（国立民族学博物館）

ダニエル・モラーレス・チョカーノ（ペルー国立サン・マルコス大学）

発表要旨

中央アンデス地帯では、紀元前 500 年頃までにリヤマの飼育が広い範囲で開始されたことがわかっている。野生ラクダのグアナコ、ビクーニャが分布しないペルー北部高地においては、家畜飼育の開始は遺跡から出土する優占種がシカ科からラクダ科へ変化することを指標として把握されてきた。また、主要な神殿遺跡ではほぼ同時期にこの現象が生じていること、遠方との交易を示唆する遺物の出現頻度が高まること、さらにエリートの出現など社会の複雑化が顕在化することなどから、ラクダ科家畜の飼育、とりわけリヤマの利用と形成期社会の発展は同調的に進行したと理解されている。

リヤマの出現が重視される背景には、農耕不能な高地に拠点をおく牧民がこの動物の輸送力を活用して温暖な峡谷から農作物を入手する民族誌にもとづいてモデル化された垂直統御説がある。さらにこの説をチャビン・デ・ワントル遺跡から出土したラクダ資料の解釈にあてはめた Miller と Burger は、神殿で消費されたラクダ家畜が高所に拠点をおく牧民によってもたらされたと主張し注目を集めた。形成期後期には、リヤマのキャラバンによって農牧複合のネットワークが形成され、中核的な神殿もそこに組み込まれていたことを示唆したからである。

一方で、発表者らによる 2000 年代以降のクントウルワシ遺跡、パコパンパ遺跡の調査結果は、リヤマの飼育が垂直統御モデルと整合しないことを示してきた。アンデス山脈は赤道にむかって高度をさげ、ペルー北高地では牧畜のベースとなるプーナが局所的にしか形成されない。当地を代表する大型の神殿遺跡はいずれも農耕が可能な温暖な環境に立地しており、作物の入手にリヤマのキャラバンは不要と考えられたからである。最近、同位体分析によるリヤマの産地推定の結果、大半の個体が遺跡周辺で飼育されていたことも判明したため、垂直統御による農牧複合モデルとは異なる説明が必要となっていた。

こうした研究状況をふまえ、発表者らは、パコパンパ遺跡から出土したリヤマ資料について、詳細な動物考古学的分析を実施した。その結果、遺跡におけるリヤマ利用が、幼獣の儀礼的消費を目的として行われていたことが明らかになった。くわえて、その消費プロセスは、リヤマ飼育開始前の形成期中期に行われていたシカの消費とよく類似していることも判明している。

本発表では、農牧複合とは異なる視点からリヤマ飼育の目的を考察するとともに、動物資源利用における革新的な転換とみなされてきた狩猟から家畜飼育への転換のなかに、動物利用の継続性が見いだせることを指摘する。

ロアイサの「訓令」(1545) からみるアンデス先住民とキリスト教の接触

大平秀一（東海大学）

発表要旨

200 人にも満たないスペイン人の「征服者」が上陸してきたとき、インカ国家の領域内の先住民人口は 300 万人とも 600 万人とも見積もられている。現代の民族誌に目を向けるまでもなく、当時の先住民の村々は、標高差・起伏に富んだアンデス地域の多様な場所に散りばめられていたことは、容易に推測することが可能である。村々の規模も極めて多様であったことは、16 世紀半ば以後の巡察記録等の史料から明らかである。こうした状況下にあった先住民とスペイン人との初期段階の接触は、如何様になされ、そして如何様な扱いの下でキリスト教権力の配下におかれていったのであろうか。

インカ期の遺跡からは、陶器、ガラス製品・トンボ玉、鉄製品など、「発見」・「征服」以後に、スペインをはじめとする他地域からもたらされた初期植民地時代の遺物が出土することがある。しかしながら、これらの遺物や遺跡の状況から、「発見」・「征服」から植民地化の過程における先住民とスペイン人そしてキリスト教との接点・接触に関し、具体的な情報が得られるケースは極めて稀である。一方で、歴史学の史料に目を向けても、その接点・接触の状況を具体的に知り得るような記述が残されているものはほとんどない。

こうした中、1545 年に、ジェロニモ・デ・ロアイサ（リマ初代司教 [1541-1546]、大司教 [1546-1575]）が、各地の司祭、修道士、キリスト教徒（エンコメンデーロ等）に向けて発行した「先住民の改宗区において取られるべき秩序に関する訓令」（以下、「訓令」と略記）は、初期段階における両者の接点・接触に関して考察し得る貴重な史料の一つとあってよい。本発表では、この「訓令」を通して、インカ征服後 12 年の段階におけるアンデス先住民の村々とスペイン人・キリスト教との接触の様相に関して考察する。

この「訓令」では、まず「発見」・「征服」の目的がキリスト教の布教と先住民の回心であったことが確認された後、「(本当の教会ではない) 教会様式」の建造物の建設、「何らかの聖像」・祭壇の設置が指示され、荘厳さを醸し出して秘蹟を執行し、教化することが求められている。キリスト教の信仰以外の目的でその「教会」に集まることは禁じられ、「ワカ」の破壊と十字架の設置も指示されている。さらには、洗礼・結婚・告解・祝祭・ミサ・埋葬・食事規制に関して、こと細やかな指示がなされているほか、農作物に対する十分の一税の徴収も求められている。こうした教化は、レパルティミエント内のすべての村に赴いて 6～8 日留まり、実践することが指示されている。

初期段階において、先住民に対してとられる態度は、1609 年～1630 年代の偶像崇拜根絶運動の際にとられるものときほど変わるものではない。ルターにはじまる宗教改革・新教の誕生、そしてそれに対するカトリックの対抗宗教改革・トリエント公会議の開始（1545 年 3 月 15 日～）という、揺れ動く当時のヨーロッパ社会の影響を受け、アンデスの先住民は、「征服」直後から、強く引き締められていったカトリックの雁字搦めの論理・理念・慣習の中に嵌め込まれていった状況がみてとれよう。一方で、ヨーロッパとの接触・関係性は、必ずしも対キリスト教という固定観念のみで捉えられるべきではなかろう。15～16 世紀のヨーロッパ社会は、無限ともいえる宗教裁判例が示すように、キリスト教と土着的価値がせめ

ぎ合っており、後者の思考をもちあわせた人々も移民しているためである。